

『蘇臺覽古と越中懷古』 李白

古の歴史の跡を覽・古を懷う

呉越の歴史

春秋時代。紀元前七七〇年から紀元前四〇三年までの約三百七十年間を、中国史ではそう呼んでいます。その春秋時代に、呉という国と越という国がありました。隣り合わせの国で仲が悪かった。「呉越同舟（仇敵同士が互いの利害が偶々一致するために、一時仲良し顔を装うこと仲の悪い同士が一時、共に並んで立っていること）」という成句の源にもなっているほど。（中国の歴史では異なる国や王朝が同じ名前で時代を超えて現れることがよくあります。ここでいう呉もそうで、約六百年後の三国時代に曹操の魏と対立した呉とは別の国）揚子江（長江）の南一帯は、春

秋時代では、まだまだ辺境の地だったけれども、その地の新興勢力が楚・呉・越でした。長江の上流に楚、離れて下流の、今の南京寄りに呉、その南に越という配置。

「十八史略」の巻一の終りに春秋戦国の章があつて、その前半に呉と越の抗争の歴史が簡潔に書かれています。その話の中核を成すのが呉王夫差と越王勾踐の因縁話で、後に「会稽の恥（敗戦の不名誉）を雪ぐ」とか臥薪嘗膽（薪の中で眠り胆を嘗める。復仇の志を忘れないために長い間辛苦艱難に耐えること）」という成句を生むことになりました。同じ話が「史記」の列伝一の伍子胥列伝第六にも書かれています。ここでは「十八史略」の記述を紹介しておきます。文中の子胥は呉の英雄伍子胥のことで、闔廬、夫差の二代に仕えたのですが、結局は夫差の不明によって斥けられて自殺。死ぬとき残した言葉がまた後世に語り継がれて歴史の過酷さを伝えることになりました。

（前略）呉、越を伐つ。闔廬傷つきて死す。子、夫差立つ。子胥復之に事ふ。夫差讎を復せんと志す。朝夕薪中に臥し、出入するに人をして呼ばしめて曰く、夫差、而は越人の而の父を殺ししを忘れたるか、と。周の敬王二十六年、夫差、越を夫椒に敗る。越王勾踐、餘兵を以て会稽山に棲み、臣となり妻は妾と爲らんと請ふ、子胥言ふ、不可なり、と。太宰伯嚭、越の賂を受け、夫差に説きて越を赦さしむ。

勾踐國に反り、膽を坐臥に懸け、即ち膽を仰ぎ之を嘗めて曰く、女会稽の恥を忘れたるか、と。國政を拳げて大夫種に属し、而して范蠡と兵を治め、呉を謀ることを事とす。

（口語訳）

（その後）呉は越を伐ち、呉王闔廬は傷ついて死んだ。そこで子の夫差が王位につき、子胥はまた夫差に仕えた。夫差は父の讎を報いようと志し、朝晩薪の中に寝起きして（身を苦しめ、）出入りの度ごとに臣に命じて言わせているには、「夫差よ、汝は越人が汝の父を殺したことを忘れたか」と。周の敬王の二十六年（紀元前四九四年）夫差はとうとう越を夫椒というところで打ち破った。この時越王勾踐は、残兵を引き連れて会稽山に立てこもり、「私は大王の臣となり、妻は妾となりました。だから生命だけはお助け下さるようにな」と願ひ出た。子胥は「赦してはいけない」といったが、執政の大臣である伯嚭が越から賄賂を貰い受け夫差に説いて越王を赦させた。勾踐は国に帰り、苦い胆を寝起きする部屋に吊り下げておき、仰向いては胆を嘗め、「汝は会稽山で受けた恥辱を忘れたか」といい、国の政治はすべて大夫の種に任せ、自分は范蠡と兵を訓練し、呉を伐つ計略に専念した。

太宰伯嚭、子胥謀の用ゐられざるを恥ぢて怨望す、と譖す。夫差乃ち子胥に属鏹の劍を賜ふ。子胥、其の家人に告

げて曰く、「必ず吾が墓に櫨を樹ゑよ。櫨は材とす可きなり。吾が目を抉つて東門に懸けよ。以て越兵の呉を滅すのを觀ん」と。乃ち自頸す。夫差其の尸を取り、盛るに鴟夷を以てし、之を江に投ず。呉人之を憐み、祠を江上に立て、命じて胥山と曰ふ。

越、十年生聚し、十年教訓す。周の元王の四年、越、呉を伐つ。呉三たび戦つて三たび北ぐ。夫差、姑蘇に上り、亦成を越に請ふ。范蠡可かず。夫差曰く、吾、以て子胥を見る無し、と。幘帽を爲つて乃ち死す。

〈口語訳〉

太宰の伯嚭は夫差に「子胥は自分の謀が用いられなかつたのを恥じて大王を怨んでおります」と譏言した。夫差は（これを信じ）そこで子胥に属鏹という名剣を与えて自殺を命じた。子胥はその家族に告げていうのには、「必ずわしの墓に櫨の木を植えてくれ。櫨は（呉王の御遺骸をいれる）棺材とすることができるから。又、わしの目をえぐつて城の東門に懸けてくれ。この目で越の兵が呉を滅ぼすのを見物したいから」と。そこで自ら首を刎ねて死んだ。夫差は（これを聞いて大いに怒り）その屍を取り、馬の革で作った囊に入れ、これを揚子江に投げ捨てた。呉の人はこれを気の毒に思い、揚子江のほとりに祠を建て、胥山と名づけて子胥の霊を弔った。さて越は前の十年は民を養い財をあつめ、後の十年は教育に努めた。かくて周の元王の四



李白像

年（紀元前四七三年）越は呉を伐つた。呉は三度戦つて三度も負けて逃げた。夫差は姑蘇台へ上り、（かつて越王がしたように）和議を越王に請うた。しかし越の范蠡は聞き入れなかった。夫差は嘆じて、「自分は子胥に合わせる顔がない」と、覆面を作つてこれを被り、顔を隠して自殺した。（明治書院新釈漢文大系「十八史略」による）

ここまでは「蘇豪覽古」と「越中懷古」の史実なのです。このように故事を詩の中で使うことを「用事」といいます。二作は作られた時がほぼ同じで内容も密接に関連していますから、両方を同時に取り上げました。

蘇豪覽古

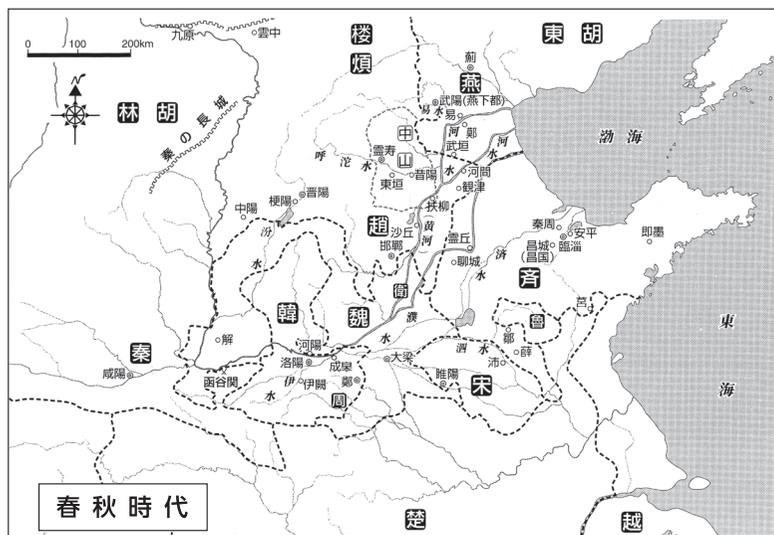
李白

舊苑荒臺楊柳新 奮苑荒臺楊柳新たなり
菱歌清唱不勝春 菱歌清唱春に勝えず
唯今惟有西江月 唯今惟西江の月のみ有りて
曾照吳王宮裏人 曾て照らす吳王宮裏の人

庭園は古び高台は荒れはてているが楊柳は新芽を吹いている。(自然はこのように再生を繰り返して永遠なのだ!)水辺の菱の実を摘む歌の美しく澄んだ声の合唱を聞くと、春の悩ましさをどうしようもない。(昔もこうだったろうか)

今はただ、大川の西に浮かぶ月があるだけだが、その月はその昔呉王夫差の宮殿姑蘇台の中の美人西施を照らしたその月なのだ。

「蘇臺」は引用した「十八史略」の中に出てくる姑蘇台のことです。江南は水郷の多い地域ですから、季節になれば菱の実を摘む若い女性たちの歌声が水辺のここかしこに流



れて、春の情緒がひとしお深くなるのでした。そういう女性たちの中には宮殿に召されても不思議ではない美女が幾らもいたことでしょう。勾踐が夫差に油断させるために贈った五十人の美女の中に西施という美人がいました。夫差は彼女が最も気に入って、彼女のために建てた宮殿が姑蘇台でした。夫差は勾踐に敗れたあと、この台上で自殺するという実に運命的な場所なのです。右の絶句の中の「呉王宮裏人」というのはまさしくその西施を指しています。西施は、宮廷に見出される前は、身分の低い洗濯女であったという語り伝えがあり、宮仕えする以前、春になれば歌を歌いながら菱の実を摘むことがあったことでしょう。李白の連想は奥が深いのです。転句の第五字「西」はただの西ではないのかもしれませんが。このような配字は時に見られる暗示的な使い方です。「西江月」は「江西月」となっている資料もありますし「月」という永遠の存在と、曾ては栄えたのに時の経過と共にはかなく消える人間とを対比して、人間存在のはかなさの悲哀を詠うのは漢詩の世界の常套的手法です。勝者として夫差が得意の絶頂にあったのも東の間なら西施の妖艶ぶりもまた今となってはただの昔の語り草に過ぎないという李白の感慨の詩で、「となれば、さて、また一杯飲むとするか」という彼のつぶやきが聞こえてきそうな絶句です。

越中懷古 李白

越王勾踐破吳歸 越王勾踐吳を破つて歸る
義士還家盡錦衣 義士家に還りて盡く錦衣
宮女如花滿春殿 宮女花の如く春殿に満つ
只今惟有鷓鴣飛 只今惟有鷓鴣しやこの飛ぶ有り

越王勾踐は臥薪嘗胆の末に吳を打ち破り會稽の恥を雪いで凱旋した。二十年の雌伏に耐え、忠節をつくした勇士たちも皆恩賞に浴し、錦の衣で故郷に帰った。越王の宮中の女性たちは花が咲いたように春の御殿に満ち溢れた。しかし、今はただ、越の地の鷓鴣が悲しげな声で飛び回っているだけではないか。

詩の内容については「十八史略」の引用によって、おわかりのことでしょう。詩のテーマも「蘇臺覽古」と同じ趣向です。異なるのは「蘇臺覽古」のほうは夫差に関してであり、「越中懷古」のほうは勾踐に関してという点です。最終的な勝者であるかに見えた勾踐も、間もなく夫差と同じような墮落と没落の道を進むことになります。挙句に越は西の楚に敗れて滅んでしまします。李白はそのことに触れてはいませんが、中国の人はその言及が無くても、李白が暗に勾踐の放逸ほういつの果をも背景に意識し隠しておいたであろうことを理解できるのです。「鷓鴣」は鶉うすに似た鳥で、

越の地に多いから越鳥とも言うのだそうです。鳴き声が人間の耳には悲しげに聞こえるというので、はかない人間存在の悲しみを暗示する景物としてしばしば漢詩句の中で用いられています。

間対格とは

「越中懷古」は第二句と第三句が対句になっています。普通、対句は前聯二句（前対格）か後聯二句（後対格）もしくは前聯後聯二句ともに（全対格）という形で構成されますが、この絶句は中央の二句が対句になっています。こういう形を間対格といいます。気をつけていますとこういう構成の詩がときどき目に止まります。川中島「題不識庵擊機山圖」も実は間対格です。第二句と第三句をよくご覧ください。

川中島

鞭聲肅肅夜過河 鞭聲肅肅夜河を過る
曉見千兵擁大牙 曉に見る千兵の大牙を擁するを
遺恨十年磨一劍 遺恨なり十年一劍を磨き
流星光底逸長蛇 流星光底長蛇を逸す

こういう構成法は起承転結の構成が難しくなりますから、一見対句には見えないような微妙な配字の工夫が必要

です。対句構成をこれ見よがしに際立ててしまいますと承句と転句が付き過ぎて、起承転結の変化が弱くなってしまうからです。そこに難しさがあり、面白さもあるというわけ、作る人は、対句であることを隠しながら対句を構成しているのです。「鞭聲肅肅・」の詩が間対格であることに気づいていない人が多いのはそういう次第だからです。話がとりとめもなくあちこちへ飛んでしまいました。たまにはこんな話もいいのではないでしょうか。

かたはらに 秋草の花 かたるらく

ほろびしものは なつかしきかな

若山牧水